

西トップ遺跡中央祠堂の解体調査と修復

—2018年度の成果—

1 中央祠堂解体修復の概要

西トップ遺跡の調査・修復事業は、現地の国立アプサラ機構の協力を得ながら、実質的には2012年から始まり、最初は南祠堂の解体と、南側と西側の散乱石材の調査から着手し、南祠堂の再構築は2015年12月に終了した。その後、北祠堂の解体・再構築に着手した。北祠堂の再構築は2017年中にほぼ終了し、2018年1月からは中央祠堂の解体に着手した。中央祠堂は大きく屋蓋部、躯体部、基壇部の3部分に分かれ、2018年1月に屋蓋部の解体と仮組を終え、2月から躯体部の解体に着手した。その後建築班の調査に合わせ11月から基壇部の解体を開始した。

2 躯体部の解体

躯体部は扉枠とその上に設置されるリンテル部分を境

に構造が大きく異なるため、躯体部上部と下部に分けて解体作業を進めた。躯体部上部はL8からL15まで8層分で、2018年の2月から3月にかけて解体をおこなった。躯体部下部はL16からL25まで10層分で、2018年の5月から6月にかけて解体をおこなった。その後、扉枠の下部と敷石の調査と実測、中央部に開けられた攪乱孔の調査などをおこなうとともに、はずした石材の仮組をおこなった。

今回の躯体部の解体によって、特に躯体部最下段と基壇部との関係や詳細があきらかになった。躯体部の最下段には砂岩による敷石が存在し（図28）、その中央部には台座状の方形石材が4個置かれる。ただしこの石材の周囲には攪乱孔の掘り込みが確認され、後述する近代と思われる攪乱後に設置された石材である。この砂岩敷石の直下にはラテライト基壇上面が存在する（図29）。

また扉枠下部の構造もあきらかになった。扉敷居は紅色砂岩製で各2石で構成される。外側の扉敷居に装飾柱が立てられ、内側の扉敷居に扉堅枠が立てられるとともに、木製扉の軸摺り穴が穿たれる。



図27 中央祠堂基壇部（南東から）

3 基壇部の解体

基壇部に関しては、内部にラテライト基壇¹⁾が存在するため、まず砂岩外装を外してラテライト基壇の調査をおこなう必要がある。全体の作業工程の関係で、まず基壇南西部の砂岩外装を外して、写真測量をおこなうとともに、基壇下部の確認を目的とするトレンチ調査をおこなった。その結果、図27に見える砂岩とラテライトの基壇外装最下段の延石の下にさらに延石1石があることがわかるとともに、その下には遺物の混じる粘土を約30cm～50cmほどの高さに積んだ整地土が何層か続いている。南祠堂や北祠堂で確認した掘込地業はおこなわれていないことが判明した。基段最下部の延石の下に続く整地土は、これまでの祠堂群周囲でおこなったトレンチ調査によって、現地表面から2m以上続く西トップ遺跡の敷地全域を覆う厚い整地土と同じと考えられ、まずこの



図28 砂岩敷石 (L26)



図29 ラテライト前身基壇上面 (L26A)

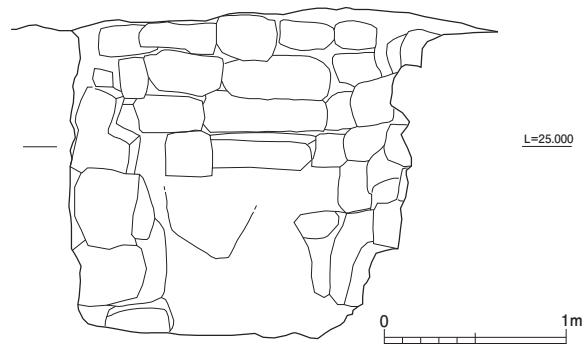


図30 搅乱孔北面実測図

地に大規模な造成を行って整地土を盛り上げ、その中央西側に中央祠堂を建立したと推定することが可能である。

4 基壇部中央搅乱孔の調査

基壇中央部には近代とみられる搅乱孔が存在する。基壇調査の一環としてこの搅乱孔を掘り下げ、基壇内部の調査をおこなった(図30)。その結果、搅乱孔は約1.7mほどの深さに掘り下げられ、掘削後は周囲の散乱石材を乱雑に投げ込みながら埋め戻した状況があきらかとなった。埋土からは針金等の近代と思われる遺物が少量出土した。また搅乱孔壁面の観察から、ラテライト上成基壇は、L26Aを含めて4層にわたりラテライトが敷き詰められ、その下は粘土質の基壇土で構成されていることがわかった。さらに搅乱孔から基壇西南に向かって蟻による大きな巣穴が検出された。ラテライト基壇の上面が南西部を中心に中央に向かって沈下しており、搅乱孔掘削後に、その埋め戻し土の隙間から基壇土内に蟻が侵入し、4層の敷石の下に大きな巣穴を作り、それが原因となって不等沈下が進み、ラテライト基壇上面が沈下したと推定された。以上の結果に鑑みて、今後蟻などが侵入しないように、改良土と版築によって搅乱孔を丁寧に埋め戻した。

(杉山 洋・佐藤由似)

註

1) 大林潤「西トップ遺跡中央祠堂の建築調査－2018年度の成果－」本書12～13頁。